

遙かなる満州の日々

富山県 斉藤 文子

昭和十四年、夫斉藤恒次は福野町青年代表として、片山甚吉、梶井芳雄、寺島多喜の皆さんと共に満州国九州村開拓団に三カ月間勤労奉仕隊として、鋤を握り働いたことがあった。広野に心を引かれ、帰宅してからも満州の話ばかりする毎日だった。明くる十五年、家族の説得も耳に入らず、三月二十八日、敦賀港より朝鮮の清津港へと旅立った。

満州国浜江省五常県、第九次冲河開拓団に入植し、その後、五常県連絡所に勤務。一年後の十六年四月ごろ、内地に帰って家財を整理して荷物をまとめ、春祭の終わった五月八日、私と子供長男正雄（五歳）、次男行雄（三歳）を引き連れ、敦賀港へと郷里を後にした。

午後三時半ごろ「天草丸」という二千トン級の大き

な船に乗り込む。親類や友達との別れを惜しみ、祖国を離れ、出発のドラの音が鳴ると寂しさが増して涙が出た。ほかの四家族も同じ別れを惜んでいる。岸を離れ故郷がだんだんと遠くなり、辺りを見渡せば海ばかり、あきらめて船室に入り、皆と一緒に休んでいた夫は船酔いで全然動けず、一食もとらずただ休んでいるだけだ。私と子供は何とか食事を口にする事ができた。夜になったが、寝心地が悪くて眠ることができないので、甲板に上がって夜の海を眺めていた。夜中になって大分船が揺れ始めた。翌日も午後からだんだん波が荒くなり、私も船酔いになり、子供と共に横になっていた。次の日は天気も良く、皆元気になって甲板に上がり、海原を眺めていた。「今日は上陸だ」と言う人がいる。まだ陸地も見えない。しばらく甲板に立っていると、船の進行方向に薄黒い雲か山か分からないが、何かが見えてきた。私の心の中で、あれが岸かもしれないと思い、船室に降りて荷物をまとめる。そのうちに船は朝鮮の清津港に着いた。

とうとう大陸にきたのである。一休みして食堂で食

事をすませてから汽車に乗る。日本の汽車より広いが、ニンニクと煙草のにおいが鼻をつき、気持ちが悪い。汽車はどこをどう走っているのか分からなかったが、

広野ばかりが見えていた。やがて夫は「五常に着いたぞ」と言つて荷物を手にして駅を降りると、「あそこに、伊藤博文さんの銅像が立っている」と指を差す。

町に入つて辦事所に着いた。早速、朝鮮人経営の写真館に入り、子供たちが元気に着いたことを知らせるための記念写真を撮つて、翌朝、五常より内地の母に送つた。

一夜明けて荷物と共にトラックに乗り、寝具だけ持つて沖河に入った。ほかの四家族の人たちもトラックの上に荷物と混載で、八十キロあまりのガタガタ道を走り、三屯本部に着いた。ここでは一軒の家に四家族が入居することになっていた。私たちの入つた家には福野町梅ヶ島の伊藤さん、魚津の寺田さん、中島さんと同居することになったが、皆さんはよい人ばかりで安心した。伊藤さんは子供をかわいがつてくださるし、私をお姉ちゃんと呼んで親しくしてください。毎日三

度の食事は食堂から運ぶので、食事当番が回ってくる。畑の草むしりに出たり、また友達もでき、毎日楽しく暮らしていた。

満州の夏は短く、早くも取り入れの秋がきてアツという間に冬になった。十二月に入つて寒さのために風邪を引き、咳が出る。毎日薬を飲んでも回復しないので、少し体を休ませることにした。正月は内地と違って家の中にいるだけ。外に出ると耳が痛いほど風が強い。あまり天気の良い日はない。夫が「病院へ行こう」と言うので、その気になって支度していたら、夫は布団をくるんでいる。「どうして布団を持つて行くの」と聞くと「遠いから」、三日泊まってくるように」との話だった。「子供たちをどうするの」と聞くと「心配することはない。伊藤さんに頼んでおくから、それに団長さんの奥さんにも頼んでおくので心配ない」と私を安心させた。四十五キロほど離れた所に日本人経営の病院があつたので、そこに入院することになった。

その時、私は妊娠していた。初めは病名が分からず、

一週間ほどしても良くならず、だんだん悪くなるので、病院の先生が沖河にいる夫を電話で呼び寄せた。夫の話では「先生が子供はまたできるから、今回はおろすように」と言っているらしい。私はたとえ小さな命でも殺すことはできないと思い、「私は産みます」と頑張った。先生から「あなたは薬を飲んでいるので、良い子は生まれなだろう」と聞かされた。一月五日ごろから入院して、四月中旬には良くなってきた。沖河本部のお祭りの時期になり、長男の正雄が伊藤さんに新聞の大きな字を習って病院に手紙を送ってくれたりするので、早く帰りたいと先生に頼んで退院させてもらい車で迎えに来た大と一緒に先生方に御礼をして本部に帰った。正雄も行雄も車の方へ寄ってきて喜んだ。三カ月余りの入院でさぞや寂しかったことと思つて、二人を抱き寄せた。子供たちは涙ぐみ、「母ちゃんこれでどこへも行かんのやろ」と言うので私も涙が出た。家族は私の入院中に団本部の横の当直室に引越して、夜間の電話の番をするために住んでいた。夫は本部の総務部長のため、林俊一団長と共に馬に乗って会

談などに部落へ出掛けるときには、帰りが夜の八時過ぎにもなる。日ごとに暖かくなって私の体も元気になる、七月に入って本部の助産婦河田先生の診察を受けた。「心配はないけど、子供はあまり強くない」との診断だった。七月十七日に男の子が生まれたが、泣かないし、二日ほど乳も飲まないで先生も心配していた。そのうちに口から黒い物を出したので取り除くと、少ししてから泣き出した。先生は「これで安心。でも弱々しく泣くので心配ですね」と言われた。夫に話したところ、五常にある日本人経営の病院に入院するよう勧められたので、またそこに入院した。

一週間ほど過ぎて沖河から電話があり、林団長と夫の二人が入植希望者の募集に内地へ一カ月ほど帰るといふ。家に子供ばかりでは寂しがるので帰るようになること、団長と夫がトラックに乗って病院に迎えに来てくれた。私はそのトラックで本部まで帰って、河田先生に見ていただくことになった。

内地に夫が帰り、一週間ほど過ぎて、手紙が届いた。母はびっくりしながらも喜んだそうだ。退院後の私の

体や赤子の心配、内地のニュースも書いてあり、毎日二人で忙しく募集に歩いているとのことだった。入植者も入ってこられ、それに母が「一度満州に行きたい」と夫に話したらしく、「では一緒に行こう」と言うことになって「満州へ遊びに行くので、家の世話を頼む」と、話すと、親戚の人はびつくりしたと言う。夫についてきた母は、満州のあまりの広さに驚いていた。

明けて昭和十八年春、本部の引越でドウジリ本部に住み着く。水田は四町、畑は二町で、水田は朝鮮人を作っていた。畑の大豆、トウモロコシなどは中国人に作っていた。もちろんお金は払った。朝鮮人はとてもやさしく、品物や食物を持ってきてくれる。また、中国人も同じで、近所に家があるので子供らに食物をくれたりするので、私の家にくると御飯を井にいっぱいあげたり、自分の作った物をあげたり、やり取りをした。中国人だとか朝鮮人だという区別はなく、お互いに仲良く暮らす毎日だった。

母も広い畑に野菜や豆などたくさん作った。スイカ、

メロン、瓜、ナス、トマト、内地と同じように早くできる。朝御飯を炊くと、外に出て畑を一回りするのが私の仕事だった。朝食後、夫は本部事務所に行き、正雄は学校に行く。何不自由なく過ごす毎日だった。

夏になると、収穫の早いスイカは毎日四個ぐらい取る。家の前庭にアンペラを敷いて、スイカと広い板と庖丁を出しておき、バケツを横に置いておくと、前の道を通る中国人がきて、アンペラの上に座ってスイカを切って食べ、私が見ていなくても、お金を置いていく。百円のお金に母はびつくりしていた。内地で百円を見たことがない、と仏壇に上げていた。子供らも毎日不自由なく食べることができた。母はカボチャが好きで大きな釜で炊きホロホロで栗のようにおいしかった。

やがて秋になり、母も内地へ帰ることになった。近所や親戚へのおみやげに、自分で作った豆をたくさん持って喜んで帰って行く。「春になったら、また満州にくるから」と皆の見送りを後にして、トラックに乗って五常駅で袁口守一郎農事指導員の先生と合流して

て内地に帰った。

しばらくして手紙がきた。「無事に着いた。とても楽しかった。生まれて初めての遠い旅、そして広野、ちよつと外に出れば、野原に花がたくさん咲いている。いろいろな花を仏壇に上げる毎日は楽しかった、と皆に話をした。十九年の春になったら、また行きます」と書いてあった。

満州も冬になると、外は雪で防寒靴を履いて雪の上を歩くと、きゅつきゅつと音がする。子供はそりで遊び、近所の子供らも家に遊びにきてみんなで楽しんでいた。

春三月、夫が五常に出掛けて行き、一週間ほどで帰ってきた。風邪を引いて熱が四一度もあつたので、私は一生懸命に夜も昼も頭を冷やしてあげたりして六日間頑張つて看病した。夕方になって、少し熱が下がりに安心した。夫が向かいの上出さんの家に行つて、牛の草を分けてもらうようお願いしてくるよう言うので、頼みに行つた。家に戻つてくると、病床の夫は私の顔をじろじろと見ていた。「どうしたの」と聞く。病氣

は急性肺炎だったので近所の皆は一週間もてば大丈夫だと言つていた。私は熱が下がつてきたので安心してた。夫の親戚で三部落にいる島田さんに手伝いになってもらい、子供の世話などをしていただくことになった。その夜、夫が私に「俺がいなくなつたら、内地へ帰るのか」と聞く。「子供が小さいので大変やけど、良い子に育ててくれるようによろしく頼む」と遺言する。私は突然のことに驚いて、島田さん、藤田さんに知らせに行くように頼み、藤田さんは本部に行き、本部員の方々と部落の細田さんほか何人も見舞いにくてくださいました。しかし、十七日朝六時五十六分、夫はついに帰らぬ人となつてしまつた。

野辺の送りをして家に帰ると、オンドルの部屋の窓際に大きな黒い蝶が止まつていた。私はびっくりした。そつとペチカのある部屋へ追ひ、窓を開けて外へ出そうとしたが出ていかない。子供らも一緒になつて外に出そうとしたが、なかなか飛んで行かない。薪が積んであるすき間に入つて出てこない。子供らは何を思つたのか、「この蝶はお父ちゃんでないかね」と言うの

で、少し見守った。まだ三月で雪もあるのに、こんな大きな蝶が家の中にいるとは珍しい。子供と同じように、私も夫ではないかと思つた。夫はまだ三十歳の若さだつた。五、六分ほど過ぎて隙間から出てきた。家の前を大きな羽を広げて雪の上を黒い蝶がどこかへ飛んで行った。一時間ほど過ぎてお骨上げを済ませて家に帰つた。

これから、どうして子供らを育てて、いったらよいのか、私の手で良い子に育てて行けるのか、心配と寂しきで、しばらくはどうしてよいかわからなかつた。

早速、内地の母に電報を打つ。数日たつて母から「満州に行く」と便りがきた。本部から松本さん、太田さん、渡辺さんたちが代わる代わる泊まりにきてくださった。夜、子供らと遊んでくれたり、話したりして一緒にいてくださった。

やがて日がたち、母がきてくれたので、少しは気が紛れた。四月に入つて、母は畑に種を蒔き、私の手伝いをしてくれた。毎日畑を見て、元気で働いてくれる。私も一緒に畑に出て草取りをしたり、二人でいろいろ

話し合いながら、子供三人の世話に明け暮れる毎日だつた。母は子供らによくおやつを作つてくれた。草を取つてきて草餅を作つたり、トナワ(トウモロコシ)を取つてきて団子を作つたり、豆を炊き砂糖をまぶして前の庭で一日干しておやつを作り子供らを喜ばせ、寂しがらないように心配りしてくれた。子供の友達もきて、母の作つた甘納豆を食べたりして遊んでいた。夏は野菜が早く実る。母は忙しく畑回りをする毎日、「大きくなつた」と楽しそうに顔をほころばせて喜ぶ。もう秋も近い。

収穫が終わると母に相談して、夫のお骨を分骨して内地に納めに行くことにした。九月に内地に行き、約一カ月ほど滞在したが、内地はとても住みにくい。お米、野菜、果物、何でも配給の毎日で、やつぱり満州はよい。母が喜んでいるのが分かつた。これで内地とのお別れと思ひ、家に残した物を二個の荷物にして送り、姉や友達や親戚の方々と別れて、出発の支度をした。

十月中旬に内地で買った標準服を着て、家についた

がとても寒かった。ペチカやオンドルに火を燃やして家の中を暖かくして、子供らにおみやげの本やおもちゃを渡すと喜んで、寂しかったことも忘れていた。母も心細い思いもしたらしく、私を見てにこにこしている。ハルビンで買った物を夕食にだして、皆で楽しんでいた。冬はもうすぐだ。外出はあまりしない。雪もあまり降らず、また日本の雪と違って水分が少ない。天気の良い日、子供らは「そり」で遊ぶ、外にでて洗濯物を干すと凍ってカチカチになるが、夕方には乾いている。外の仕事もいろいろあつて、薪割りや鶏・豚・牛、それぞれの小屋の掃除をしたり、毎日の仕事はのんびりしていた。正雄が学校から帰ると遊び相手ができるので、二人の子も喜んでゐる。夕暮れになると、母の手料理をいただく。薄暗い「ランプ」の下で共に話し合い、夜が更けると床に入つて寝る毎日。バケツの水は凍つて割れないので、ペチカの上にバケツを乗せて火を焚く。それが冬の毎朝の仕事だった。

四月になると正雄は三年生、行雄は一年生。夫が死んで一年になった。早いものだ。姉たちや親戚の人は

みんな元気だろうか。内地は品物がなく、リング一個でも配給だ。夜は家の電球に黒い布をかけたなり、夜汽車の光がもれぬように布をかけ、駅弁さえ買えない。食物はとても不自由で、お金があつても買えないことを話すと、母は「やっぱり満州は良いね。食物は何でもあるし、野菜もたくさんできる」と言い、満州にきたことを喜んでゐるようだ。北満の春ももうすぐだ。

昭和二十年の春になった。畑仕事も忙しく、子供のために頑張り、母と二人で畑に出て働いた。八月に入ると畑の中はいろいろな収穫物でいっぱいになり、内地と違つて何でもたくさんあるので、無造作に収穫する。一日の疲れとともに家に入り、夕食の支度をする。食事が終わると、ランプの光では仕事ができないからペチカのある部屋に行き早く床につく。朝までぐっすりだ。

夜が明け太陽が昇る。今日も良い天気だ。朝食を済ませて外にでる。その日は軍事訓練だ。松井さんの家の前に皆が集まり、手榴弾の安全装置の使い方などいろいろの訓練で疲れた。何でも男のまねをと思つてい

たところ、十五日、本部から男の人がきて「日本が負けたというニュースが入った。ソ連軍が牡丹江市内まで入ってきているので、夜は一つの家に固まって連絡があるまで勝手に行動しないでくれ」と伝えて行く。

それでは松井さんの家がよかろうと話し合い、皆が集まる。突然のことで心が落ち着かず、食事ものを通らない。この後どうなるかと思うと、子供や母が心配でならなかった。その夜の八時半ごろ、飛行機が飛んで行く音がする。どこへ行くのだろうかと外に出ると、月夜だからよく見えた。少し時間がたつと、赤い光が戻ってきた。新京の方から帰る途中、吉林の鉄橋を破壊したソ連軍の飛行機だったのだ。鉄橋は通行不能となったとのことで、本部から、度々連絡があった。「日本は戦争に負けた。敗戦だ。残念だ」と無念そうに言っていた。

翌十六日の朝、家に帰って食事の支度をする。みなで食べていると本部からの連絡で、三道沖河に避難するよう命令が出た。しかし、三井先生が五常から帰るのを待つことにした。それまでに掛ける支度をして

いると、三井先生が帰ってきて、県公署からの命令で五常に避難することになった。三日以内に十日分の食糧を用意して団を出発することに決まる。何を持って行くか心が決まらない。まず、子供の着る物を柳行李（ろうりし）に詰める。母と私の着る物はどれも大事な物ばかり、良い着物から行李二つに詰めた。母が恨めしそうに外に出て行く。畑から野菜を取ってきて、夕食の支度をしていた。今夜も松井家で泊まった。

十七日朝、食事が済むと十日分の食糧の支度をした。子供二人のリュックサックでは十日分も入りきらない。母も手伝って大きな風呂敷をリュックサックのようにして、忘れ物のないように何度も入れたり出したりしている。そこへ世話になった朝鮮人がきて、ミシンや布団をくれと頼むので、世話になったお礼だと思つてあげると、お金を少しおいていった。今夜は家で休むことにして、牛や鶏や豚など皆、小屋から離してやった。夜のうちにどこかに行くと思つていたら、豚は豚小屋にいる。鶏もどこへも行かないし、十八日朝起きて戸を開けると、牛が戸の入口に立っている。牛も異

変に気が付いているのか、餌をやっても食べない。哀れそうに私の顔を見ている。このまま捨てていくのがかわいそうだ。日本が戦争に負けたのだから、この家で寝るのも今夜限り、明日は五常に出発だ。私も家を離れるのが寂しい。皆残して出て行かねばならなかった。

十九日は朝から忙しく、吉田知英さんとは大の仲良しで「一緒に行こうね」と約束する。知英さんも子供が二人いた。私も正雄と行雄の二人を歩かせ、母に輝男をおんぶさせ、私は重い荷物を背負い、手に食糧を持つ。林本部団長、三井先生、溝口先生と共に、皆一度に出発した。三部落の人、二部落の人たちと一緒に歩き、なかなか遠いが子供らは何も言わずに歩く。一部落近くまで来たとき、先頭の男の人が「一部落の作業場で全員白決している」と言い、男の人たちは見に行った。中国人が団員の着ている物を剥ぎ取って持っていったようである。見るも無残な丸裸の死体を一人ずつ集めて丁寧に葬り、作業場に火を付けて焼く。そのとき作業場の中で急所が外れたのか、女の子が助

かり、救助された。その作業場の中に以前本部で一緒だった福野町梅ヶ島の伊藤ともえさんもいた。子供の世話をしていただいたことなどいろいろと思い出が胸にせまり寂しかった。皆で黙禱して出発した。

午後も大分過ぎて沖河街に着いた。もう夜だ。疲れて野宿することになり、土の上に寝転がる。一夜明けし朝になる。牛車を挽いていた牛も大分疲れていた。

持ってでた大事な着物を一枚二枚と道端に捨て、少しでも軽くして牛を歩かせた。そこへ中国人がきて、私の牛を見て「馬車をだして五常まで送ってやるから、その牛と交換しよう」と言った。半ば不安に思ったが、母や子供らは五常までとても歩けないと思い、運に任せて送っていただくことにした。どこまで行けるか、無事に五常まで着けるか、私らの命さえもわからない。とにかく行ける所までだけ歩いて行こう。背の荷物も車に乗せて吉田さんの子供も乗せ、私は歩いた。女や子供らは危険だから中ほどを歩き、前と後に男の人が続く。途中までくると雨が降り出し、だんだん激しくなってきた。道は川のように流れ、ぬかるみにはま

つて足が抜けない。一歩歩けば半分戻るような泥道を、一足一足と歩く。足が馬車の溝にはまり、濡れた体が重く、ただ無言で歩き続けた。その後、雨も小降りになり、泥にまみれた重い足を引きずりながら後ろを見ると、長い列だ。子供らの乗ったマーチヨ（馬車）と、大分離れた。皆が腰まですぶぬれの姿で歩いている。

地下足袋も重く、なかなか前進できない。中国の土は粘土のような土だから、苦勞して歩く。やがて雨も止み町に近づいた。屋根の下でさえ休めず、野宿ばかりだ。

一夜明けて、今日こそ五常に着けると思い、心を勇気づける。長い道だった。何事もなく、皆が元気で五常まで着けたら嬉しい。今日は少し曇っているが、雨が降らなかつた。また午後になって、少し小雨が降ってきた。男の人が「早く五常に行き、皆の御飯を炊こう」と言う。私を含めて六人が速く歩き、五常の国民学校に着いた。夕食の支度に大きなお釜にお米を五升ほど入れて洗う。薪で炊くが、なかなか炊けない。中はメッコ（半煮え）になる。素早く上の方からおにぎ

りにして、少し水を入れて炊いた。慣れない大きな釜で、水加減がわからず苦勞する。もうひと釜炊く。塩だけのおにぎり、おかずはなし。おにぎりは出来上がったが、皆が着かないので心配になり、吉田さんと町はずれまで迎えに行った。

夜の八時半ごろで暗い。遠くからかすかに聞こえるマーチヨの音を少し立って聞いていた。次から次へとマーチヨが入ってくる。闇夜でだれのマーチヨか分からない。私は大きな声で呼んでみた。上の道には人がこない。下の道を歩いているようだ。もう一度、「正雄、行雄」と呼ぶと、下の方で話声がする。また呼ぶ母の声がした。「皆一緒かね」と聞くと、「輝男だけ上の道のマーチヨだ」と言う。「道が悪いので下の道を歩いている」と母が答える。町はずれに子供と母が着いた。マーチヨはまだ着かない。心配して待つうちに、マーチヨの音がしたので迎えに行った。中国人にだれが乗っているのか聞くと「子供一人」と言う。見れば輝男が雨に濡れて眠っていた。抱き上げておんぶして、荷物を降ろして中国人にお礼をいってマーチヨを帰し

た。中国人が正直に五常まで送ってくれたことを嬉しく思い感謝した。

家族一緒に避難先の学校に行く。二十分くらいで着いた。荷物の中は雨で濡れていたが、少し着替えて夕食のおにぎりを配った。皆かぶりついて食べた。腹がふくれると子供らは横になり、体を寄せ合いながら休んだ。母も私も隙間のないほどに体を寄せ合い、一夜を明かした。

朝起きると、昨日と変わって良い天気だ。外に出て濡れた物を干した。皆もたくさん干していた。しばらくすると中国人がきて、干した物を持っていつてしまった。慌てて外に出ると、ほとんど持ち去られた後だ。男の人たちが「ここは危ない」と言うので、町から離れた農学校に行くことになり、残りのおにぎりを食べて出発した。とても道が悪く、やっと学校に着いたときは、もう夕暮れになっていた。学校はめちやめちやに破壊され、ガラス窓はなく、敷き物もない。校舎の板さえはぎ取られ、土間に風呂敷を敷いて座る。今夜からは食物もなく、夜暗くなってから生徒の作ったカ

ボチャ、トマトを取ってきて、グラントで火を焚いて皆で焼いた。私も母や子供に半焼けのカボチャを持って行き、少しの食事で夜を過ごす。夜の明けのを待つて畑に行き、食べ物を探した。まくわ瓜の小さいのがあった。それを取ってきて食べる。男の人たちは「これでは皆、死んでしまう」と町に出て県公署に行き、食べ物を配給していただくようお願いし、トナワ、大豆をいただいた。これで一安心したのも束の間、明くる朝、中国人の暴徒が食糧を全部持ち去っていった。その後、子供の衣類を大豆の中に隠しておいたのを見に行くと、何もない。食物もない。子供が少し離れた泥水の小川に入っでどじょうを捕まえてきたので、焼いて食べて過ごす。大人も子供も皆、食べ物に苦労した。四、五日過ぎてまた襲撃に遭う。私ら避難民は学校の外に出されて、一人ずつ体を調べられた。取る物がなくなると帰って行く。少したつて、私がレンガの下を掘って埋めたお金や、ペチカの破れ目の中に預金通帳や保険の書類を隠して置いたのもみんな持ち去られ、母や私はこれで一銭もなくなってしまった。ほ

かの人たちは便所の中に百円札をたくさんばらまき、後で長い木を持ってきてすくい上げていた。何度も襲撃に遭い丸裸になって、これからどうして暮らせばよいか、みんなの口凌ぎを心配する。

二、三日過ぎ、中国人部落から働きにこないかと誘われ、五、六人で一緒に行くことになる。私は正雄を連れて、少しでも子供にも仕事をさせた。それを見ていた中国人が子供の方にて話している。子供が後について行くので心配で子供の行く先を見ていると家に子供を連れていき、食べ物を与えたり昼食もたくさん食べるように勧めている。夕方、帰りにねじり棒や餅をたくさんくれるので、農学校に帰って母や子供らに分けてあげた。翌日も正雄と一緒に働きに行く。だんだんと寒くなり、内地に帰るニュースもない。男の人が沖河に偵察して帰ってこられ、治安が良いから、林団長が沖河行きの希望があれば一緒に行こうと話があり、私も沖河行きを希望した。友達とは別れなければならぬ。

子供、母と共に代わる代わる歩いたり、マーチョに

乗ったりで、三日三晩かかって中国人部落のコンスに着いたのは夕方近くで、家を探して、中沢さんと一緒に借りて入る。顔見知りの朝鮮人から味噌をたくさんいただき、中国人からも夜食べるお米もいただく。とても皆が親切にしてくれるので、嬉しかった。明くる朝から、落ちていた破れた手袋を拾って、刈り残しの稲の穂を摘み取る。毎日毎日、朝日の昇るのを待って摘み取りに出掛ける、母も子供も手伝う。一生懸命に働いた。

十一月末ごろになると氷が張る。我慢、我慢と働いた。粃は中国人にお願いして白で摺る。お米に出来上がり、お礼を言う。一夜明けて御飯を炊いていると、辛い朝鮮漬けを持ってきてくれる。嬉しかった。戦争に負けた日本人に対して親切にしてくれる。三カ月ほどお米の御飯を食べていないから、おいしくて、辛い漬物でたくさんいただいた。

数日後、朝鮮人から夜、遊びにこないかと誘われ、四人で遊びに行った。慰みに日本の歌を歌ってくれた。その歌は今でも心の中に残っている。「金も要らなき

や、名も要らぬ、愛の古巢に戻るのさ」と言う歌詞だ。夜も更け、外に出ると月夜の空に円盤が飛んでいた。じつと同じ所にいる。皆、初めて見たので不思議に思い立って見ていると円盤の中に赤く火が光っていた。なかなか動かないので家に帰って休んだ。

五、六日過ぎたころから、夜になると暴徒がやってくるようになった。毎夜、銃を手に持って家の中へ土足で入ってきて、銃を私らに突きつける。今にも殺されそうで、早く出て行ってくれんことを祈っていた。子供らは私の後に隠れ、つかまっていた。周りをうろつき、取っていく物もないと出ていく。夜もおちおち眠れないので昼少し寝る。こんなことが毎日毎夜と続く。毎日が地獄のようだった。平田さんの娘さんも釜の下のすすを顔につけたり、髪を切つて男のようになる。私も子供をおんぶして顔に墨を付けたりした。敗戦後、着のみのままでお風呂など一度も入っていない体に、手、足、顔とだれが見ても嫌がる体にして、日中は三時間ほど恐怖の中で過ごす。夕方になると、気が抜けて夕食も口に入らない。そんな日が続いた。

春三月中ごろ雪も少なくなり、子供らは小川でどじょうを取ってきて焼いて口にする。ある日、満人が家に来て沖河の家にこないかと誘われる。母と話し合い沖河に行くことにする。母はほかの満人の家に世話になり、内地に帰る日を待っている。私も毎日水汲みしたり、食事の世話をして時には畑の手伝いの毎日である。子供らもかわいがられ、満人の子供と遊んでいた。そのうちにまた夏がきた。母から五常に行くから早くでるようにと連絡があり、早速支度をすする。世話になった人たちにお礼を言つて出た。

母たちが沖河に着いたのが午後、母と別れて五カ月、やっと一緒に帰れる。子供らも喜んだ。団員の皆が沖河で一休みしていると、世話になった満人がきて、輝雄をくれと言つて連れていこうとした。私は夢中で後を追いかけて、満人に承知させて連れて帰り、早く沖河をでようと決心し、皆と一緒に出発した。町はずれまでくると暗くなってきたので、道端で野宿する。

八月十一日ごろだったと思う。明くる朝出発、町はずれより四十五キロの道を歩く途中、二度ほど路上で

野宿し、十四日ごろ五常に着いた。農学校の収容所で仲間と一緒にあった。友達は大分死んでしまっていた。私らが沖河に入った二日後に弟秀雄が死亡。その後は暴徒との闘いに明け暮れたが食べ物だけは恵まれていたので望みを捨てずに頑張る毎日だった。少しでもお金を稼ぐために働きに出た。

難民の引揚げも近づいているとのことだったが、一日、一日と過ぎ、引揚げが九月十四日と決まったときは皆と共に喜んだ。十四日昼過ぎ、五常駅で汽車に乗りうとしたら、この汽車は病人の乗る汽車で乗れないとのこと、老爺嶺駅まで歩いて行く。駅に着いたが、その日は汽車が動かない。翌朝九時近くに出発だと言う。そこでまた野宿だ。五常を出るとき配給の乾パンを食事代わりにいただいたのでそれを食べる。夜は寒いので野原の草を摘んで土の上に敷き、一晚中枯れ木を焚いた。周りを囲み、皆で暖まって居眠りをする。夜が明けると老爺嶺駅に行き汽車を待つ。着いた汽車は屋根がなく、びつくりした。でも、皆文句も言わず、次から次へと乗る。女子供には車両が高いので、

後から押し上げてもらい、やっと乗った。これでひと安心。狭くて座ることもできない。体を寄せ合いながら夜汽車で過ごす。明くる朝、吉林近くに着きここから歩く。ソ連の飛行機に鉄橋を破壊され通れないということだ。八路軍の兵士がきて、丸木船で向こうの岸まで渡してくれる。子供らが親から離れるのを嫌がって泣く。団の人が皆渡つたのが夕方ころ、今日は吉林泊りだ。皆、倉庫の中に収容された。建物は土間で窓や戸もなく、夜は寒い。外に出て、枯れ草を手でつかみ取り、少しの草を土間に敷く。

満州は十月中ごろになると一段と寒くなる。一週間ほど滞在する。そのうちに少し熱がでてきた。なるべく動かないようにして休んでいた。明日は出発だと聞く。あまり食欲もなく、朝、起きると頭がふらふら足もふらふらする。でも皆と一緒に行かねばと頑張つて歩く。

吉林駅から新京へと無蓋の貨車に乗る。新京駅に着くと、日本人の住宅は引き揚げた後で、メチャメチャに壊されていた。私らはそこで四日ほど過ごし、その

ときの食事にトナワのお粥をいただいて少しは元氣を取り戻した。新京を出発する日がきた。新京駅から錦州までまた無蓋車に乗る。少し雨が降り、子供や母、ほかの人たちもアンペラを汽車の上から掛けて雨を凌ぐ。私たち大人は立ったまま肩を寄せ合いながら、錦州に着いた。土砂降りですべて水につかる道を宿泊所まで歩いた。雨のためまた熱がでて休む。食事もとれない。その時、三井先生も病気で亡くなられた。

二、三日の滞在で、錦州から待ちに待ったコロ島行きた。病氣の人は病院船に乗るので別れ別れになる。母が私の病氣を心配して、病院の先生に「子供が三人もいるので、祖母一人で連れて帰ることができない。子供の母親も一緒にコロ島へ行けるようにお願いします」と頼んでくれる。先生が私に注射をしてくださり、朝までゆっくり体を休めるように言われた。先生の言われたとおり休み、朝起きて見ると良くなっている、これで一緒に帰れると思いきや嬉しくて、先生にお礼を言った。

コロ島より引揚船に乗った。船の中で、また診察を

受ける。一週間ほど船の中で泊まる。船が九州博多港の岸壁に着くと、待ちに待った日本へ上陸。第一歩は十二時ごろだった。そこで白い薬剤（DDT）を頭から体へとかけられ、皆が白くなっている。それが終わると、昼食を取りにきてくださいと連絡があった。私が皆の分を取りに行き、一個ずつ、おにぎりを渡した。子供たちは喜んで先に食べ、私の食べるのをまだほしそうに見ている。かわいそうに思い、少しずつ分けて食べさせた。時間がきたので、引揚者の収容所に案内される。着ている衣類を皆脱いで、お風呂に入った。浴槽には五、六人しか入れない。十五カ月ほど風呂に入ったので本当にさっぱりした。男も女も軍隊の服で、上から下まで男物だ。毛布も軍隊のもので親子五人に二枚いただいた。夜はおいしい御飯をいただき、三日後に博多を後にした。

下関から広島への汽車の中は満員で、通路まで人が座っており、男の人は窓から用を足さなければならぬ。私ら女性は腹が痛くなるほど耐えた。大坂、福井と移動するうちに、少しは下痢をする人もいた。女の

便所は混み通しで、できるだけ耐えた。金沢、石動までくると汽車の中も少し楽になった。

十月二十八日夕方、無事に福野の実家に着くことができた。終戦からの五十年、体一つで耐えに耐えてきた開拓団の皆様と共に、幸多かれと祈る心境です。

【執筆者の横顔】

昭和十四年、文子さんの夫斉藤恒次氏は福野町青年代表として、満州国九州村開拓団に三カ月間の勤労奉仕隊で鋤を握り、働いた経験から、帰宅して以来、満州の広野に心を引かれ、満州の話ばかりの毎日だった。昭和十五年、家族の説得も耳に入らず、三月二十八日、浜江省五常県第九次冲河開拓団に入植し、五常街連絡所に勤務となった。

一年後の十六年四月内地に帰り家財を整理した。五月敦賀を後にして甲板の上から海を眺めて故郷に残してきた母を思い出しているうちに自然に涙を流した文子さんである。

開拓団の宿舎に落ち着く間もなく、文子さんの体に

変調があり子供二人を隣家の奥さんに預かっていただけ、十七年一月に入院し、四月退院できた。正雄君と行雄君に、今度は母ちゃんどこにも行かないで、と言われ二人を抱いて涙を流す。七月十七日に男の子が生まれ、文子さんは三人の母親となった。

御主人は内地に帰り開拓者募集かたがた、帰りに母を連れてきた。母は広い満州を見てびっくりしていたが、翌十八年の秋に内地に帰って明十九年の春になったら満州にくるからと言って出発した。

昭和十九年の三月になって御主人は風邪を引いて一度の高熱を出し、看護のかいもなく三月十七日急性肺炎で死亡してしまった。三十歳の若さだった。母はびっくりして日本から満州に飛んできた。母と二人で秋の収穫をして終わったころ、御主人の骨を内地に納めるべく故郷に帰り一カ月ほど滞在して、また満州の開拓地にもどる。

二十年の四月には正雄君三年生、行雄君一年生になる。八月十五日、日本敗戦、本部の命令で逃避行が続く、母は輝雄君をおんぶ、文子さんは荷物を背負って

正雄君と行雄君の手を引いて安全な所への出発である。

五常で暴徒に襲われての闘いは全く地獄化した日本人の醜状、言語に絶するものがあつた。

九月十四日、日本人の引揚げの決定通知をうけたときの喜びは正に生気をとりのどした。

吉林から新京を経てコロ島から博多港に上陸。十月二十八日無事、故里の家に帰りついた。

文字さんは開拓士の御主人を失つてから、一家の大黒柱となり、現地で亡夫の遺志を継ぎ活躍され、終戦後、母と三人の子供を引き連れて引き揚げて後、多くの辛酸を経て今日、富山県の福野町で平和な生活を送っている。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

満州開拓の夢破れて

岐阜県 奥 田 昭 吾

義勇軍志望の動機 昭和十八年四月、国民学校高等科の最終学年となつた私たちには、卒業後の進路を決定しなければならぬ時期であつた。

体の頑健な者はこぞつて少年兵志望であつたが、やせた体で体力も無い私には到底無理とあきらめていた。そんなある日、学校の図書室で一冊の本が目についた。それはB六版の小冊子で表紙には満蒙開拓青少年義勇軍と書かれ、内容は写真入りで義勇軍生活が紹介されたものであつたが、私はこの本によつて満州開拓の夢を見ることになつた。

その年の夏休みには満蒙開拓青少年義勇軍拓務訓練に参加し、広漠千里の大原野開拓の夢はますます強固なものとなつた。

私の家は、山間でわずかばかりの田畑を耕すかたわ